

トランスジェンダーの物語を学生と読む

片 山 亜 紀

1. はじめに

2013年度の私のゼミでは、セクシュアル・マイノリティにかかわる問題を年間テーマとして、英語圏で書かれたいくつかの文学作品を読んだ。そのうちひとつがアメリカの作家Rachel Gold¹によるYA（ヤング・アダルト）小説、*Being Emily*（2012）だった。

*Being Emily*の主人公にして語り手は、クリス・ヘスという高校生。アメリカのミネソタ州で、リバティという架空の田舎町に住んでいる。身体は男の子としての特徴を備えているが、意識のうえでは女の子のジェンダー・アイデンティティをもち、医療的介入によって身体を女性に近づけることができるならそうしたいと願う、トランスセクシュアルの高校生である。²

時代は2000年代。ストーリーはクリスが16歳のある日、同級生で恋人の女の子クレアに、自分も女の子だとカミングアウトすべく決意を固めるところから始まる。クレアによるサポートやインターネット上で知り合った当事者たちからのサポートを受けながら、最初のカウンセリングの失敗、そして適切なカウンセラーとの出会いを経て、クリスは家族にもカミングアウトする。両親は激しく拒絶するが、クリスは何とかその状況をくぐり抜け、若い女性エミリーとしての生を獲得していく。

私のゼミでは文学作品を英語で読んでいる。私の専門が文学作品のジェンダー分析であることから、セクシュアル・マイノリティに関心をもつ学生が集まりやすい傾向はあるものの、全員がそこに強い関心をもっているわけではない。それでも、個々の解釈を発表しながらゼミの回数を重ねるうちに、トランスジェンダーの人々を取り巻く問題について、皆が知識を深めることができたようだった。ゼミ生の一人が尽力して、当事者の方を招き、お話を伺うことも

できた。

作品読了後のゼミ生への課題は、*Being Emily*のキャラクターや設定を使いながら、二次創作を英語で書くことだった。条件のひとつが「セクシュアル・マイノリティの現実在即した設定をひとつ入れること」で、ゼミ生たちは*Being Emily*の記述や作品以外の情報をもとに、何らかの「現実」を取り入れながらショート・ストーリーを書いた。ただし、教員の私からは英語表現としての流暢さやストーリーとしての一貫性を重視したアドバイスをし、「現実」の厳密さはそれほど求めなかった。

最終的に22人の学生が*Being Emily*の二次創作を書いた。³ 設定はまちまちで、視点人物ひとつ取っても、クリスが6人、クリスの母が6人、クリスの父が4人、クリスの弟が4人、その他のキャラクターが2人というように、面白いようにばらけた。しかし、そのなかでも複数の学生に共通していた点がいくつかあった。とくに私が興味深いと思ったのは以下の2点である。

- ▶ 視点人物の違いを越えて、10人が学校でのいじめに言及していた。
- ▶ クリスの母はサブキャラクターにすぎないのに、6人が視点人物に選んだ。(主人公クリスを視点人物に選んだのも6人で、同数である。)

本稿では、この2点から出発して、原作における学校と家族の表象を分析したうえで、アメリカのトランスジェンダーの人々をめぐる現実と作品がどう対応しているのかを検討したい。

*Being Emily*はヤング・アダルト小説、つまり若い人たちに向けて書かれた小説である。日本の大学生であるゼミ生たちは、アメリカと社会的・文化的事情は異なるものの、年齢層としてはほぼ想定されている読者層と言ってよい。したがって、彼ら／彼女らの関心に導かれつつ作品を考察することで、作品の特徴をより明確にでき、現実との有意義な比較ができると考えられる。

2. 学校でのいじめ

2-1. 原作におけるいじめ

ゼミ生たちは「セクシュアル・マイノリティの現実在即した設定をひとつ入れる」という条件を満たすために、学校でのいじめというエピソードを盛り込んだと考えられる。原作に立ち返ってみるならば、そこではどのようにいじめ

が表象されていたらどうか。

ゼミ生の中には、クリスが直接いじめのターゲットになる場面を書いている人も多かったが、原作のクリスはハイスクールにおいて直接いじめられているわけではなかった。しかし他の生徒に対して絶えず緊張していることに注目すると、いじめの対象にならないようにつねに警戒していると推測できる。

具体的に作品をたどってみよう。冒頭の数ページから、クリスが「内側は女の子」(4)⁴という意識をもっていることは明らかだが、同時に学校ではいつも男の子としての演技に徹していることも示されている。たとえば、クリスは学校で水泳部に所属しているが、第1章において登校してきたクリスは、さっそく水泳部の他の男子部員たちに呼びかけられる。するとクリスは「自動音声プログラム」(5)を脳内で発動させてから、彼らとの会話をはじめる。

最近では考える必要もなかった。声帯には適切な応答のすべてがプログラムされているので、とくに注意を向けなくてもよかった。コードは何年か前に書き込み済みなので、いまでは脳がただ読み取ればいい。

／実行：チームメートへの挨拶

1. 「やあ、どう？」と言う
2. a) スポーツ b) 車 c) 天気 d) 授業、のどれかで冗談を言う
3. はっきりしない音で同意のサインを出す
4. 2をもう一度実行する
5. a) にやりと笑う b) 肩をすくめる c) 冗談っぽく叩く、のどれかの動作をする
6. 授業開始のベルが鳴るまで3～5を繰り返す (6)

この「自動音声プログラム」のおかげで、クリスは水泳部の他の男子部員から浮かないですむ。学内の他の場面でも、窮地に陥りそうになるとクリスは同様のプログラムを動かして、男の子としての演技を貫く (12, 37)。

そもそもこうした「自動音声プログラム」をクリスが自作して脳内にインストールしたのは、男の子になろうと本人が努力した結果である。恋人クレアに「『はくは女の子なんだ』」(18)とカミングアウトする場面のクリスによれば、5歳のころ、幼稚園でいつも女の子の列に並び、そのたびに先生に男の子の列のほうに連れて行かれたという。その体験を経て、クリスは自分の行動を修正

するようになった。

「ぼくはいっそう努力して男の子になろうとした。…(略)…たぶん自分には何かが足りないんだ、たぶんだれでも努力しないと成れないんだと思って、父さんに車のことを教わったり、水泳部に入って男の子たちと仲良くして、彼らと同じことをやった。6年もそうやっていると、かなりうまく真似できるようになった」(20)

女の子の列に並んでばかりいた5歳のときから「6年もそうやって」いたということは、単純計算で11歳のころ、クリスは男の子としてふるまえるようになったらしい。「自動音声プログラム」も、そのころできたを見ていいだろう。

したがって、一見したところ、クリスは自発的に男の子になろうと努力しているように読める。しかしながら、クリス本人が別のところで「いつもクリスというふりを続けるのは本当に大変」(6)と語っているように、自分のジェンダー・アイデンティティに逆らって男の子の演技を続けるのは苦しいことのはずである。だとすると、そうしなければならない外的なプレッシャーがあると考えられるのではないだろうか。

カミングアウトの決断に時間がかかることも、外的プレッシャーをうかがわせる事実である。クリスは、クレアには本当の自分のことを知ってほしいと願うが、そのことによって自分の秘密が広まってしまうかもしれないとも恐れている。カミングアウトをしようと決めた当日、クリスはまだ迷っている——「起こりうる最悪のことって何だろう。クレアがぼくを捨てて、学校の人々にもぼくの親にもしやべってしまうかもしれない。そしたらすべて冗談だったと嘘をつくか、逃げるかだ。あるいは自殺するか」(6-7)。ここで、恐れている事態として「学校の人々」に広まることが最初に出てきていることに注意したい。それは「自殺」にも追い込まれかねない事態である。

「学校の人々」は逸脱的なジェンダー表現をどう考えているのだろうか。作中のいくつかのエピソードからは、ハイスクールの教室ではいわゆる「普通」とは異なるジェンダー表現にネガティブな反応が示されることがあるとわかる。その反応はクリス本人に直接向けられたものではないが、その効果として、クリスは教室でかなり苦しい我慢をしなくてはならない。

たとえば、心理学のクーパー先生が「『セックスとジェンダーの諸相』」(8)

についての授業で生徒に宿題を出す場面を見てみたい。男子生徒たちはその課題をいっせいに嫌がり、クリスはフリーズしてしまって女子生徒の好意的な言葉にも答えられない。

クーパー先生が宿題を配った。男子生徒たちはブーイングだったけれど、ぼくは口をあぐり開け、彼らを真似るのも忘れてしまった。ドキドキしてパニックして、心臓が喉から飛び出しそうだった。宿題には「明日の朝起きたら異性になっていたと仮定しなさい。あなたの体験について400字のエッセイを書きなさい」とあった。

「キモイ」前の席の男子生徒が言った。

「まるでネアンデルタール人ね」と、ジェシカが彼に言い返した。彼女はぼくのほうを向いて瞬きした。「あんな馬鹿とちがって、あなたは女の子になれるよね？」

／実行 緊急回避システム

システム障害が起きました

ぼくは彼女をぼんやり見つめた。「そうだね」と言った。

「わたしが男の子になったら、服の着こなしを教えてあげたい男子がこのあたりに何人もいる」自分なら格好いい男の子になると決めこんで、そう彼女は言った。(51)

クーパー先生の宿題は「『異性になっていたと仮定しなさい』』というもので、いつもと異なるジェンダーに移行することがどんな体験か、想像させようとするものだ。想像を書けばいいだけのこの宿題を、男の子たちはブーイングと罵倒語（「『キモイ gross』」）で迎えていることから、彼らにとってはジェンダー表現を想像の中で逸脱してみることにすら、心理的な抵抗が大きいとわかる。

付け加えれば、この場面に女の子たちがブーイングに加わっているという記述はなく、女子生徒の一人ジェシカは宿題をむしろ楽しみにしていることから、逸脱的なジェンダー表現への反応には明らかなジェンダー差がある。男子生徒の「『キモイ』」発言の背後には、女性であることへの嫌悪感、つまりミソジニーがあるのかもしれない。

作品のべつの箇所にはトランスジェンダーの人々への嫌悪感、つまりトランスフォビアが教室で露骨に示される場面もある。12章ではクーパー先生の授業

にゲイとレズビアン of 活動家が招かれ、生徒たちの質問に答えるのだが、トランスジェンダーの人々の話題になったときに、一人の男子生徒が大声を上げる。

「なんだって」フットボール部のジェイソンが言った。「男が女になってノーマルな生活を送るんだって？ そいつはひでえな」

「そんなことない！」クレアが大きすぎる声で叫んだ。みんなが彼女を見て、ぼくはひたすら〈自分じゃなくてよかった〉と思った。「トランスセクシュアルの人だってあんたやわたしと同じ。ただずっと大変な生活をしているの。もしあんたが本当は女の子で、その低能頭の体に囚われているってわかったらどうする？」

「つまり腑抜け女みたいに、ってこと？」彼がそう言って、クラスが沸いた。ぼくはべつで、身動きできなかった。

「静肅に！」クーバー先生が怒鳴った。顔中が真っ赤で、風焼けの斑点も額も赤く染まっていた。

「ひでえな」ジェイソンがまた沈黙を破った。彼は続けた。「神はゲイを造らなかったし、めかしこんで娘っ子になりたいなんて男も絶対に造らなかった。胸クソ悪い」(96)

男子学生のジェイソンは「『男が女になってノーマルな生活を送る』」ことがありうると納得できないばかりか、トランスジェンダーの人々が神の創造物であるとも認められず、存在をまるごと否定したい気持ちを「『ひでえな That's fucked up』」「『胸クソ悪い That's disgusting』」といったヘイト・スピーチ（憎悪表現）で強調している。これはあからさまなトランスフォビアである。さらに、ジェイソンが男性から女性に移行するタイプのトランスジェンダーだけに執拗にこだわり、女性を「『腑抜け女 pussy』」「『娘っ子 chick』」などと侮蔑して呼んでいるところは、あからさまなミソジニーがあると言っていいだろう。

また、この引用で、トランスフォビアとミソジニーがジェイソン一人のパフォーマンスに終わっていないことも注意しておきたい。教室は静まり返ってジェイソンとクレアのやりとりを聞いているようだが、ジェイソンの応答に「クラスが沸い」ている。つまりトランスフォビアやミソジニーを許容する雰囲気は、クリス、クレア、クーバー先生以外のクラス全体に広がっている。

こうして見てくると、ハイスクールの生徒たちは逸脱的なジェンダー表現に

それほど寛容ではないことがわかる。とりわけ男子生徒にとって抵抗感は大きく、彼らのトランスフォビアにはミソジニーが組み込まれている。このことを踏まえて考えてみると、クリスが無理をしてでも男の子の演技を続けようとしている理由も明らかである。それは、男の子の身体的特徴をもって生まれ、女の子に移行したいクリスは、いわゆるMTFトランスジェンダー⁵の生徒として、男子生徒たちのトランスフォビアとミソジニーのターゲットになりかねない位置にいるからであり、女子生徒の多くが男子生徒たちに同調しかねないことを考えれば、彼女たちに支持してもらえるかも疑わしいからである。

2-2. いじめの現実

現実には、アメリカの学校でトランスジェンダーの生徒たちへのいじめはどのくらいあるのだろうか。National Center for Transgender Equality⁶が5つの調査結果をサーベイした報告書によると、いじめはかなり広範で、「アメリカのトランスジェンダーとジェンダー非同調型⁷の若者のほとんど全員」に及んでいるという。⁸たとえば6年生から12年生（日本の高校3年生に当たる）の全米のトランスジェンダーの生徒を対象とした調査⁹を引いて、以下のような結果を紹介している（回答数は295）。

- トランスジェンダーの若者5人のうち4人（82%）は、トランスジェンダーであるという理由で、学校が安全な場所と感じられないと回答している。
- 5人のうちほぼ4人が、他の生徒からのトランスフォビア的あるいはホモフォビア的ハラスメントを経験したことがあると回答している。しかも「しばしば」「頻繁に」経験している生徒がほとんどである。
- トランスジェンダーの生徒の過半数が、過去1年のうちに、小突かれる、押されるなど、学校で身体的なハラスメントを受けたことがあると回答している。
- 半数近くのトランスジェンダーの生徒（44%）が、過去1年のうちに少なくとも1度、殴られる、蹴られる、あるいは凶器を使った危害を加えられることがあったと回答している。
- 4人のうち3人（76%）が、望んでいないにもかかわらず、他の生徒から性的な言葉を投げかけられたり、触われたりしたと回答している。

- 過半数 (62%) がサイバースペースでのいじめがあったと回答しており、同じく過半数 (67%) が他の生徒によって私物が盗まれたり壊されたりしたことがあると回答している。¹⁰

これらの数字を総合すれば、トランスジェンダーの生徒の大多数が言葉や軽い身体接触をとまなういじめや私物侵害を経験していて、半数近くは暴力的ないじめも経験しているとわかる。

Being Emily のクリスをこの調査結果に当てはめるとどうなるだろうか。まずは最初の「学校が安全な場所と感じられない」に該当するだろう。男子生徒たちがジェンダー移行を想像してみることにすら抵抗を示して『「気色悪い」』と言ったこと、ジェysonがトランスジェンダーの人を『「ひでえな」』『「胸クソ悪い」』と言い捨てたことは、直接クリスに対するものではなかったにしろ、トランスフォビア的なハラスメントである。

しかしクリスはそれ以外のことは免れているようである。言葉によるいじめも身体的・性的いじめも直接は受けたことがなく、インターネットで噂を流されたこともなく、私物がなくなったこともない。そうしてみると、アメリカのトランスジェンダーの生徒の現実には照らした場合、クリスは例外的なくらい、うまくいじめを免れているとわかる。¹¹

ゼミ生たちが二次創作で書きたいじめの場面の多くは、言葉によるものであり、たとえばクリスなしべつの人物が仲間外れにされたり、差別的な言葉を投げつけられたり、陰で噂されたりするものだった。上の調査結果に照らせば、学生たちはアメリカのトランスジェンダーの生徒について、その日常の一端に想像が及んでいたことになる。しかし言葉によるいじめの他に、身体的暴力、性的暴力、盗難、私物破損などの被害もまた、アメリカの多くのトランスジェンダーの生徒の日常である。¹²

3. トランスジェンダーの人と家族

3-1. 母の拒絶

本稿の「はじめに」で述べたように、ゼミ生にはクリスの母親シャロンを視点人物にして二次創作を執筆した人が比較的多かった。実は原作のシャロンはクリスの願いをなかなか認めようとしない「悪役」として描かれている。カムイングアウトしたクリスに冷たい言葉を投げつけ、外出禁止にして外部との接触

を断とうとする。

ゼミ生がシャロンを取り上げたのは、察するに、母親でありながら自分の子どもの願いを聞き入れないことに強烈な違和感をもった人が多かったからではないかと思う。¹³ 二次創作ではシャロンの人物像がさまざまなかたちで修正され、シャロンの頑固さの原因を過去のトラウマに求める人もいれば、第三者から忠告を受けてシャロンが考えを改めるところを書く人もいた。

ゼミ生たちがシャロンの人物像にディテールを付け足したり書き換えたりしたことは、二次創作としてはとてもいいと思うのだが、原作においてシャロンがどうしてクリスのカミングアウトを拒んでいたのかは謎のまま残っている。そこで、ここではもう一度原作に立ち戻って、シャロンがどのようにクリスに応答していたのかを確かめることにしたい。

原作の冒頭で、母親のシャロンは家事と仕事の両方をこなす、有能で優しい母として登場する。第1章ではクリスと弟マイキーに弁当を用意して、『『今日はたぶん仕事で遅くなる』』(3)と予定を伝えながらマイキーの寝癖を直し、クリスの宿題のことを気にかけている。第4章ではクリスが鬱々としているのを案じてカウンセリングに行こうと提案している。カウンセラーのウェバー先生はクリスの悩みを理解できず、ウェバー先生のカウンセリングは失敗に終わるのではあるが。

ともあれ最初の数章ではシャロンは思いやりのある母親として描かれ、父親のジェリーのほうが無神経な親として印象づけられる。ところが、さらに小説を読み進めていくと、無神経なのは父であって母ではないという読みは裏切られていく。¹⁴ 小説の中盤からシャロンはクリスへの態度を硬化させていくのである。

その様子を順にたどってみよう。第10章では、クリスは両親へのカミングアウトを考えはじめていて、受け入れてもらえそうか探るためにシャロンに『『娘がほしいと思ったことはない?』』(76)と尋ねる。すると、シャロンは複雑な反応をする——クリスを同性愛者と取り違えたうえで、宗教上の理由を挙げて同性愛を否定する。

「母さん、娘がほしいと思ったことはない?」

シャロンは本を置いた。「何回かはね」彼女は言った。「マイキーを産んだあとで、もう一人作ろうかって考えた。母さんはあなたたち二人が大好きよ、

それはわかっている？」

「わかっているよ」

「何を心配しているの？」彼女は訊いた。「あなたは父さんほど男っぽくないけれど、素敵で若い男のひとになったじゃない」

「そのことじゃないんだ。男っぽくないことを心配しているわけじゃないんだ」とぼくは言った。

母は表情を強ばらせて背筋を伸ばした。「クリス、あなたの父さんとわたしはあなたを週末ごとに教会に連れていったりしていないけれど、でもわたしたちは敬虔なクリスチャンだから、べつのライフスタイルには賛成できない。わかっているわね？ もし訊きたいことがあるなら、お医者さんに話してアドバイスをもらいなさい」

ぼくの心は小さな黒い塊になり、ボロボロと砕けた。ぼくがゲイかもしれないと思うだけでこんなに動揺するなら、「ぼくは本当は女の子なんだ」と言ったところで、とてもうまくいきそうにない。(77)

シャロンは「『べつのライフスタイル alternative lifestyle』」という婉曲表現で、男女で夫婦となる以外のライフスタイル、具体的には同性愛者として生きていくことを指している。ここでシャロンはクリスの真意を誤解し、誤解にもとづいて反対してはいるが、まだ反対のしかたは穏やかであることに注意したい。『『べつのライフスタイル』』という言い方にネガティブな含みはなく、『『敬虔なクリスチャン』』だからと、同性愛に反対する理由も一応は示している。¹⁵

ところが、第13章でクリスがもう一度シャロンに探りを入れるとき、シャロンの反応はさらに硬化する。ここでクリスは両親には内緒で、ミネアポリスにあるトランスジェンダーのサポートグループに参加して帰ってきたところである。何気ないふりを装いつつ、クリスが「『男から女になった人』」(109)に会ったと告げると、シャロンはたちまち警戒心をあらわにする。

「あなた……知らない人と話をしたの？」

「モールの真ん中だったから大丈夫だよ」ぼくは言った。「ちゃんと自分のことは気をつけているよ。ただ、そんなことができるなんて、面白いと思ったんだ」

「クリス」と、母さんは厳しい声で言った。「ミネアポリスに一人で行っ

てほしくないし、そんな奇形なんか話しかけて時間を無駄にすることは
ないはずよ。もしまたそんなことがあったら、すぐにその場を立ち去りな
さい」

「ただの会話だったんだよ、母さん。ぼくに誘いかけてきたわけでもな
いし」

「そういう人が何を考えているかはわからない。あなたは素敵な若い男
性なんだから、もっと気をつけないといけない。もっと注意するって約束
してちょうだい」(109)

シャロンにとってトランスジェンダーの人とは蔑視の対象であり（『『そんな
奇形なんか freaks like that』』）、不審人物である（『『そういう人が何を考えてい
るかはわからない You don't know what people like that are thinking』』）。ここに
は同性愛者の生き方を『『べつのライフスタイル』』と呼んだときのような遠慮
はなく、生き方の否定にキリスト教のフィルターも必要としていない。

そしてクリスのカミングアウト後には、シャロンは『『奇形』』という蔑視表
現をクリス本人にぶつけることになる。20章でクリスはカウンセラーのメンデ
ル先生——最初のカウンセラーのウェバー先生とちがい、トランスジェンダー
についての専門知識をもち、クリスの悩みを適切に理解できる先生として登場
する——の立ち会いのもと、『『ぼくは女の子だ』』(157) と両親に打ち明ける。
しかし両親の反発は想定していた以上に激しく、シャロンはクリスと差し向か
いになってこう言い捨てる。

「女になったって何も解決しない」彼女はぼくに言った。「あなたの人生
がメチャクチャになるだけよ。自分を見てごらん、想像できないくらい醜
い女になる。あなたは奇形になる。お兄さん、タワゴトはすぐやめなさい」
(161; 下線は引用者による)

この「奇形」という言葉を、シャロンはことあるごとに繰り返していく。一ヶ
月後の食事会で、クリスがシャロンの思い通りにふるまわなかったとき——

「一晩だけでもやめるわけにはいかないの？ 年がら年中、奇形でいな
いといけないの？ どうしてあなたがそんなに抵抗するのか、わたしには

わからない。父さんもわたしもすべてをあなたに与えたのに、あなたはこの——自然からの逸脱にこだわっている」(170-71; 下線は引用者による)

さらに一ヶ月後、父親の取りなしでクリスがホルモン治療を始めたあとも——

「あなたは女じゃない。女として行動していないし、女のような考え方もしていない。あなたはただの奇形になるだけで、あなたが欲しがっているものは手に入らないんじゃないかしら」(203; 下線は引用者による)

この間、クリスはシャロンに必死の反抗を試みている。あるときは男物の服を切り刻み、自室に立てこもって手から血がにじむまでドアを叩き続けもする(171-72)。にもかかわらず、シャロンの思い込みは揺らがない。彼女にとって、性別を移行するということは相変わらず「奇形」になることであり、社会で生きていけない人間になることなのである。

したがって、シャロンはおよそ3つの段階を経て、女性として生きたいというクリスの願いを否定するに至っている。第一に、同性愛は宗教上の理由から認められない。第二に、トランスジェンダーは「奇形」だから認められない。第三に、クリスが性別移行を希望するとしたら、クリスは「奇形」になるということでありそれは認められない。

シャロンはクリスが「奇形」である、「奇形」になると断じるときに、それまで親子としていっしょに過ごしてきた16年間のことはすっかり忘れてしまい、ひたすら「トランスジェンダーの人は奇形である」という思い込みにしがみついているように感じられる。この思い込みはどこから来るのか、次節で迫りたい。

3-2. なぜシャロンはトランスジェンダーの人々を認めないのか

ここでおそらくヒントになるのは、クーパー先生の授業に来ていたゲイ活動家の言葉である。ハイスクールの生徒たちを前に、彼はトランスフォビアについて語っていた。

「トランスフォビアこそ、いまなお残っている偏見のひとつで、おかしいとさえ疑ってもいない人もまだ多い。ゲイやレズビアンを受け入れは進ん

で、ホモフォビアは格好悪いと考えられるようになってきたけれど、トランスジェンダーの人にひどい反応を示す人々はまだまだたくさんいる——たぶん自分自身がセックスとジェンダーに不安を感じているせいだね」(95-96)

この引用で、ゲイ活動家は2点について指摘している。第一に、トランスフォビアはホモフォビアより問題として意識されることが少ない。第二に、トランスフォビアはその人自身のセックスやジェンダーへの不安感に原因がある。それぞれの指摘をシャロンに当てはめて考えることで、彼女の心理を探ってみたい。

● 〈トランスフォビアはホモフォビアよりも問題化されていない〉という点について

シャロンが同性愛を「『べつのライフスタイル』」と呼んでいたのに対し、トランスジェンダーの人のことは「『奇形』」と呼んで憚らなかったことを考えると、たしかにこのことはシャロンに当てはまるようである。シャロンは同性愛者もトランスジェンダーの人も受け入れないことから、トランスフォビアとホモフォビアの両方を持ち合わせていると考えられるが、トランスフォビアのほうがより露骨である。¹⁶

その原因は何かと考えると、シャロンはトランスジェンダーの人をあまり認知していないのかもしれない。既に見たように、クリスの「『娘がほしいと思ったことはない?』」という質問を、シャロンは「男っぽくない」ことへの不安と捉え、ゲイであることの悩みと結びつけていた。つまり、シャロンは同性愛者については何となく知ってはいても、トランスジェンダーの人についてはほとんど白紙の状態なのである。

なぜトランスジェンダーの人はあまり知られていないのだろうか。それは「トランスジェンダー」「ゲイ」というカテゴリーの性質のちがいに由来するだろう。「ゲイ」は当事者にとってアイデンティティになる言葉であり、シャロンが言っていたように、ひとつの「ライフスタイル」になり得る。しかし「トランスジェンダー」とは当事者にとってそれほど獲得したいアイデンティティではない。性別を移行させること、つまり「トランス」を終了させることこそ、目指される目標であることも多い。なかでも「トランスセクシュアル」の人々は、医療的介入によって性別移行を望む人たちであるので、とくに「トランス」を終了

させたいという気持ちは強いだろうと推測される。

たとえばクリスはインターネットの当事者コミュニティにアクセスしながら、「トランスセクシュアリズム」「トランスセクシュアル」などの名前についてこう考える。

インターネット上にはいいコミュニティがいくつかあったけれど、ぼくのお気に入りにはジェンダーピース〔引用者注——原文ではGenderPeaceで、直訳すれば「ジェンダーの平和」〕という名称のコミュニティだった。名称もクールだし、管理人がここは「トランスセクシュアリズムを乗り越えようとしている」人のための場所だと書いているのも好きだった。だって、ぼくは「トランスセクシュアル」になりたいわけでも、一生、男の体から抜け出せない女でいたいわけでもなかったから。(32-33)

クリスにとって「トランスセクシュアル」は乗り越えたい過渡期の状態である。このことは、クレアや家族へのカミングアウトのとき、クリスは「『ぼくは女の子』」(18, 157)とは言っても、たとえば「ぼくはトランスセクシュアル」というようには表現していないことからわかる。

作中にはクリスと同年のもう一人の当事者として、ナタリーという人物が登場するが、ナタリーもクリスに近い考え方をしており、呼び方についてクレアに訊かれたときにこう説明する。

「自分のことを『トランスセクシュアリズムのサバイバー』とか『サバイバー』と呼ぶ人もいる。簡略化してTガールとかTSと言う人もいる。トランスセクシュアル、トランス、トランスウーマンと言う人もいる。どんな考え方をするかによる。わたしは『女の子』とか、必要なときには『Tガール』というのが好き」(64)

したがって、当事者にとって「トランスセクシュアル」という名称との付き合い方は一様ではないが、少なくともクリスやナタリーなど*Being Emily*の中心人物たちにとって、アイデンティティとして積極的に採用される言葉ではない。¹⁷

よって、ゲイ活動家の指摘の一点目を受けて仮説をまとめればこうなる。ト

ランスジェンダリズムは人々によく知られていない。トランスジェンダーの人たちも、望む性別に移行することが目的なのであって、「トランスジェンダー」として目立ちたいわけではないため、トランスジェンダリズムという現象があることは目立たず、人々に知られていかない。そうした状況のなかで「トランスジェンダー」として目立つ人がいるとき、その人は「奇形」として嫌悪の対象となってしまう。

こう考えてくると、シャロンの言動のある不可解な点についても理解できる。クリスの願いを断固として受けつけないシャロンだが、原作の「エビログ」では、ホルモン治療を進めながら美容形成手術を受け、「エミリー」と名乗るようになった我が子をようやく受け入れるようになったと、クリスの口からやや唐突に報告されている。

ああ、公平を期して言うと、母さんは新しくできた娘を受け入れられるようになった。母さんが意見を変えるまでには丸2年かかった。母さんはクリスが死んだみたいに感じていて、どうやって悲しんだらいいのかもわからなかったんだと思う。でもわたしは女の子としてかなり素敵に見える
と母さんは考えている。(209)

ゼミ生の多くはこの書き方に不満で、クリスを「奇形」扱いしていたシャロンがいきなり豹変したように感じられる、シャロンの心の変化をもっと書き込むべきだという意見が強かった。

しかし一度考えてみると、シャロンは何も変化しておらず、クリスの外見が変化して女性らしくなってきた、つまり「奇形」という蔑称に該当しなくなってきたために、その言葉を引っ込めたただけだとも読める。べつの言い方をすれば、トランスフォビアじたいはシャロンのなかで健在なのである。¹⁸

- 〈トランスフォビアの原因はセックスとジェンダーについてのその人の不安にある〉という点について

まずセックスとジェンダーという用語について確認しておくと、どちらも男女の性別にかかわる用語であり、作中のクーバー先生の言葉を借りれば、セックスとは「その人の生理学的特徴」で、ジェンダーとは「心理的特徴、文化的特徴、学習されて身につける特徴」のことである(8)。

そのうえで、おそらく次に押さえるべき点は、セックスもジェンダーも曖昧さのあるものだという点である。

セックスつまり人の生理学的特徴とは男女の二つにくっきりと分けられるものではないし、人は男か女のどちらかに生まれるともかぎらない。*Being Emily*ではそのことがクレアを通して語られる。クリスのカミングアウトを受けて、クレアはインターネットで調べて次のことを理解する。

科学を理解するのは大変で、遺伝子や配偶子についての情報をあまりにたくさん読みすぎて、すべてを頭に入れることはできなかった。クレアにわかったのは、初期状態のヒトの体はメスの体であるという事実だった。テストステロンの量が少ないとき、子宮の中の胎児は女性になる。遺伝子がすべてを決めるわけでもなかった。少なくとも、中学のときの二週間の性教育で教わったのとはちがっていた。XX染色体のヒトは自動的に女性の体になると思っていたけれど、胎児の発達にはホルモンなどの要素も影響をおよぼすため、男性になることもあれば、女性と男性のどこか中間ということもある。XY染色体のヒトも同様である。XXY染色体やXYY染色体のヒトもいる。まれにXXYY染色体もある。(23)

つまり、ヒトのセックスは染色体とホルモンなどの要素の組み合わせで決まり、その帰結は男女の二通りとはかぎらない。

ジェンダーもまた、男らしさと女らしさに二分することはできないし、一般的と考えられているジェンダー表現から個人のジェンダー表現がずれることはよくある。作品では、このことをカウンセラーのメンデル先生が解説している。

「ジェンダーが合わないという経験はだれにでもあると思う。私が大学に通っていた60年代、ズボンをはいている女性はジェンダーに合っていないと考える人はたくさんいた。その考えがなくなってよかった。それから夫がしばらく教職を離れて、子育てをしながら本を書いていたときも、男が子どもと家にいることへの風当たりと格闘しなくてはならなかったの」

(113)

女性がズボンをはくこと、男性が家にいて育児をすることも、時代や社会に

よって逸脱的なジェンダー表現とみなされる。だとすると、期待されているジェンダー表現とは一致しないふるまいをすることは、トランスジェンダーの人にかぎらないと言える。

セックスとジェンダーにこのように曖昧さがあることを踏まえると、ゲイ活動家の言いたかったことも理解できそうである。セックスとジェンダーがはっきり二分されるものではなく、ある種のジェンダー表現が時代や社会によっては非難されることもあるとすれば、生きていくにあたって自分のセックスとジェンダーが不安になる人もいるだろう。そうした人にとっては、性別移行をしようとしているトランスジェンダーの人は、セックスとジェンダーの曖昧さをまさに体現している人のように感じられるのかもしれない。そこで自分についての不安をトランスジェンダーの人に投影して、いわれのない恐怖と抱く。ここにトランスフォビアの端緒がある。このように活動家は言いたかったのではないだろうか。

こう理解したうえでシャロンの言動を見てみると、自分のジェンダー表現に自信のなさそうな様子が読み取れる箇所がある。小説の前半、8章で、シャロンが手作りしたシナモンロールを頬張りながら、クリスは母親の日頃のふるまいについてこう考えている。

母さんはキャリアウーマンと専業主婦のあいだで揺れているように見えた。どちらでも素晴らしいと思うのだが、母さんはその2つを行ったり来たりで、ある晩は夕食は自分たちで作って食べなさいと言ったかと思うと、次の3,4日間は料理を全部自分で作った。(59)

小説のあちこちに書いてあることを総合すると、シャロンは17歳でクリスを妊娠してジェリーと結婚し、大学には進学せず、数年後にはジェリーが失業したこともあって働き始めている。現在、夫は働いているが彼女も会社秘書の仕事をしており、平日には毎日出勤して、午後3時に終わるときに遅くなるときが週に2日ある。家事負担の多くが彼女にのしかかるなかで（作品では、彼女が家事をこなしているあいだ、夫が趣味と副業を兼ねた車いじりをしている場面がよく出てくる）、仕事と家庭のバランスをぎりぎりのところで保っていると言える。上のクリスの証言が示しているのは、そのシャロンが無理をして家事をさらに多く引き受けようとしているという事態であり、彼女は専業主婦とい

う伝統的なジェンダー表現からのズレを気にしていると考えられる。

小説の後半で、シャロンにとっての仕事と家庭のバランスはおそらくますます危機に瀕している。クリスの性別移行に反対のシャロンは、最初のカウンセラーのウェバー先生に助けを求める。身体の変更ではなく、心理療法によってクリスは治るとウェバー先生は考えているからである。先生はシャロンにこう告げる——「『あなたとご主人は、男らしさと女らしさの両極がはっきりわかるような、バランスのとれた結婚のいいサンプルをクリスに見せてあげないといけません』」(180)。この「『男らしさと女らしさの両極』」を、シャロンとジェリーはその後実践することになる。

母さんと父さんはウェバー先生に会いに行き、帰ってきてからというもの、毎晩家族でいっしょに夕食を食べるようになった。母さんは父さんに一日のできごとを話すように勧めたけれど、マイキーが2分毎にさえぎって、学校の話や最近見たテレビ番組の話を始めるのだった。(180)

ここでクリスが皮肉を交えて報告しているのは、シャロンがさらに家事に時間とエネルギーを費やすように求められ、夫が家族の中心にいるような伝統的な家族イメージのお膳立てまでやらされている事態である。

ところが小説の後半で、シャロンの仕事の負担も減っていない。勤務先の会社は収益が上がったからと食事を開催してくれるが、シャロンも家族ぐるみで招待されることから、彼女も会社の好成績に一役買ったのだと考えられる。だとすると、彼女は家庭と仕事にますます引き裂かれている状態にある。

シャロンが「『年がら年中、奇形でいいといけないの?』」と発言していることをすでに見たが、この会社の食事会のときのクリスのふるまいに向けられたのがこの発言だった。クリスはシャロンの上司の娘と化粧品の話をしていただけだったのだが、そうした他愛ない会話にもトランスフォビアをぶつけるくらい、シャロンは過敏になっていた。ゲイ活動家の指摘を踏まえれば、シャロンはこのとき自分のジェンダー表現についての高まる不安をクリスにぶつけていたと言える。

以上まとめると、シャロンのトランスフォビアの理由は2つ考えられる。第一に、トランスジェンダーの人のことをそもそも認知していないため。第二に、自分のジェンダー表現についての自信のなさを、トランスジェンダーの人に投

影しているため。第一の点については知識をつければ改善することかもしれないが、第二の点について、シャロンは家事と仕事を自分のためというより家族のために抱えているので、改善は難しそうである。

3-3. 家族の現実

前述のNational Center for Transgender Equalityは、National Gay and Lesbian Task Force¹⁹と共同で、2011年に全米のトランスジェンダーとジェンダー非同調型の人たちを対象にかなり広範なアンケート調査を行っている（回答数6,450）。²⁰ 調査結果の分析は現在も継続中らしく、現段階であまり詳細な結果は公表されていない。家族についての項目もあるが、現在のところ、集計結果にはトランスジェンダーの親の回答とトランスジェンダーの子どもの回答が混在している。このような不備には留意したうえで、公表されているデータをいくつか取り出してみたい。

まず、「回答者の57%が家族からの拒絶を経験している」という結果が得られていることに注目してみると、²¹ クリスがシャロンに拒絶されたような体験を、過半数のトランスジェンダーの人々が経ていることがわかる。たとえばある回答者は以下のような自由記述を寄せている。

「1970年のこと、ホルモン治療を受けるために父に『治療同意書』にサインしてほしいと頼んだところ、父は同意書を破いて、性別移行するならお前を殺すぞと言った」²²

母ではなく父が殺意をちらつかせてまでして拒絶した例である。

次に、「回答者の過半数（61%）がカミングアウト後に家族の関係はゆっくり改善に向かったと報告している」という結果が出ていることに注目してみたい。²³ これは、シャロンが時間をかけながら（作品では『丸2年』とあった）クリスそしてエミリーを受け入れていったようなプロセスを、過半数のトランスジェンダーの人々が経験しているということを意味する。ある回答者は両親、そして子どもに受け入れてもらった体験をこう語っている。

「こんな状況で生活していくことができ、とても幸運だったと思う。みんなおおむね寛容で、受け入れようとしてくれた。それに両親のサポート

も受けられたことも、カミングアウトしたとき6歳だった息子がいま11歳になって、わたしをサポートしてしてくれることも幸運だと思う」²⁴

回答者が「『おおむね寛容』」と書いているのは過去に衝突があったからなのかもしれないが、5年の時間を経て「『幸運』」と表現できる状態に達していることがわかる。

しかし61%が「ゆっくり改善に向かった」ということは、改善に向かえない、関係の断絶した家族もあるということである。べつの回答者はこう書いている。

「去年、家族にカミングアウトしたら『100%サポートする』と言われた。でもそれから家族は電話番号を変えて接触を断ってしまった」²⁵

「『電話番号を変えて接触を断ってしまった』」ことから、この回答者と家族とは物理的に離れて生活していることがうかがえる。記載がないので事実是不明だが、回答者と家族は成人した子とその親なのかもしれない。カミングアウトから1年しかたっていないので、家族関係はこれから改善していくかもしれないが、一方的に電話番号を変えるということは決定的な拒絶の意志を感じさせもする。回答者にとってみれば、とても残念な状態である。

こうして実際の調査結果を見てみると、*Being Emily*はトランスジェンダーの子どもが家族の一人にいったんは拒絶されながらやがて受容してもらえるというストーリーになっている点で、アメリカのトランスジェンダーの人の過半数の現実を捉えていたと考えられる。²⁶ しかし同時に、「過半数」ということは、異なる経験をしている人たちもかなり多いことを示唆していて、まったく拒絶に遭うことがない場合も、逆に拒絶されたままになる場合もかなりありそうである。

4. 結び

本稿では、ゼミ生たちの二次創作に見られた2つの共通点をもとに、原作*Being Emily*を読み直し、アメリカのトランスジェンダーの人たちに関する調査結果と照合させて検討した。

1点目の学校でのいじめについては、原作ではクリスは直接のいじめのター

ゲットとはなっていないが、それはクリスが男の子としての役割演技に徹していたからだった。調査結果からは、トランスジェンダーの生徒に対しては言葉によるハラスメントだけでなく、身体的暴力、性的暴力、盗難、私物破損などの加害もかなり頻繁であることがわかり、いじめのターゲットとなった場合の被害の深刻さをうかがわせた。

2点目の母シャロンのふるまいについては、原作ではクリスを「『奇形』」と繰り返し呼ぶなど、クリスの性別移行の望みを執拗に拒絶していることが確認された。それと同時に、なぜそこまでクリスの願いを拒絶するかについても、原作のべつの登場人物の言葉を手がかりに2つの仮説を立てることができた。それはトランスジェンダーの人をそもそも認知していないからであり、自分自身のジェンダー表現の自信のなさを、トランスジェンダーの人に投影しているからであった。調査結果からはトランスジェンダーの人が家族のだれかに拒絶されるということはよくある経験であると同時に、一時的な拒絶はあっても、家族関係がやがて修復されていくこともよくあることがわかった。ただし、現実において家族がトランスジェンダーの人を拒絶するのはどんな理由によるのか、関係が修復されていくときにトランスフォビアも解消されていくのかどうかという点は疑問として残った。

原作ではクリスの語りからなる各章のあいだに、恋人のクレアを視点人物とした章が挿入され、クリスをサポートする彼女の迷い、悩み、決断などがかなり詳しく語られている。クレアはシャロンとはまったく異なるタイプのクリスチャンで、聖書の言葉をもとにトランスジェンダーの同胞を積極的にサポートする論理を見つけていく。クレアの章を詳しく読めば、学校でも家庭でもはびこるトランスフォビアを撃退するためのヒントがつかめるのかもしれない。ゼミの時間にはクレアについても多く語り合ったのだが、二次創作ではだれもクレアを視点人物に選ばなかったこともあり、本稿では考察しなかった。稿を改めて論じたい。

謝辞

ゼミ生の二次創作は獨協大学父母の会の助成金をいただいでゼミ論集にまとめた。同会に心より感謝を申し上げたい。

また、本稿はゼミ生の二次創作を読んで感じたことをもとに書いたものである。毎回のゼミの時間にいっしょに考えたことから着想を得ている。毎回力のこもったレジュメを作成し、ディスカッションを重ね、さまざまな角度からの論点を提出して、知恵を

絞ってくれた彼ら／彼女らにも感謝したい。

注

- 1 Rachel Gold は、ミネアポリスでセクシュアル・マイノリティに向けた情報誌のライターを7年間務めていた。その体験と、トランスジェンダーの人たちを対象としたインターネットのサイトを運営していた体験と、あるトランス女性と一緒に過ごした体験などをもとに*Being Emily*を書いたという。本作品は彼女の第一作にあたり、「トランスジェンダーの子どもを主人公にした最初のYA小説」と評価されて、the Moonbeam Awardやthe Golden Crown Literary Awardなどの文学賞も受賞している。第二作*Just Girls*は2014年秋に出版予定で、主人公の友だちとして*Being Emily*のクリス（エミリー）とクレアも登場するらしい。
“Being Emily” <<http://beingemily.com/>> (2014/5/26 アクセス)
“Interview: Rachel Gold” <<http://www.imwithgeek.com/books/interview-rachel-gold>> (2014/5/26 アクセス)
- 2 「トランスセクシュアルtranssexual」の人とは、自分の身体の備えている性別に違和感をもち、ホルモン治療や性別適合手術などを受けてべつの性別に移行したいと望む人たちを指す。「トランスジェンダーtransgender」の定義はさらに広く、自分の身体の備えている性別に違和感をもっている人すべてを指す。その中には「トランスセクシュアル」の人も入るが、それ以外の人たち、つまり性別移行は望むが医療的介入までは求めない人たち、ときどき、あるいはつねに異性装をするだけで納得できる人たちなども入る。これらの定義は一般的なものであり、*Being Emily*もこれらの定義にしたがっている（たとえばpp. 95-96, 113）が、2つの用語はべつの意味合いで使われることもある。詳しくは野宮亜紀ほか『性同一性障害って何？——一人一人の性のありようを大切にするために』（緑風出版、2003）、pp. 46-49。
クリスは「トランスジェンダー」であり「トランスセクシュアル」であるので、本稿では適宜二つの名称を使い分けることにする。なお、「トランスセクシュアル」に対応する疾患名として「性同一性障害 gender identity disorder」があり、*Being Emily*でも言及されている（120, 124, 127, 159）。日本でも認知度がもっとも高い名称である。しかしトランスジェンダー／トランスセクシュアルを疾患とみなすかどうかは議論があり、クリスも自己定義としては用いていないので、本稿でも使わない。
- 3 ゼミではイギリスの小説家Ali Smithの*Girl Meets Boy* (2007) も読んだので、こちらの作品をもとに二次創作を書いた学生もいた。
- 4 Rachel Gold, *Being Emily* (Tellahassee: Bella Books, 2012) . 以下、*Being Emily*からの引用は、それぞれ訳出後にページ数をカッコに括って示す。
- 5 クリスのように男性から女性への性別移行を望む人は、一般にはMTF (=male to

- female) transgender という。女性から男性へはFTM transgenderである。作中でもこれらの用語は使われている (たとえばp. 106)。
- 6 2003年に設立された団体でワシントンDCにある。トランスジェンダーの人々の平等を推進することを目的に掲げている。<<http://transequality.org/>> (2014/5/26 アクセス)
 - 7 「ジェンダー非同調型 (gender non-conforming)」とは、その人の性別に対する社会的期待とは異なるジェンダー表現をする人のことをいう。日本ではあまりなじみのない表現で、定訳もないようなので、仮に「ジェンダー非同調型」と訳しておく。
 - 8 National Center for Transgender Equality, *Peer Violence and Bullying Against Transgender and Gender Nonconforming Youth* (2011) , p. 2. <<http://www.transequality.org/PDFs/US%20Civ%20Rts%20Commn%20NCTE%20statement%205%206%2011.pdf>> (2014/5/26 アクセス)
 - 9 Emily A. Greytak, Joseph G. Kosciw, and Elizabeth M. Diaz, *Harsh Realities: The Experiences of Transgender Youth in Our Nation's Schools* (2009) . <<http://www.umass.edu/stonewall/uploads/listWidget/25125/trans%20youth%20in%20schools.pdf>> (2014/5/26 アクセス)
 - 10 National Center for Transgender Equality, *Peer Violence and Bullying Against Transgender and Gender Nonconforming Youth*, p. 2.
 - 11 National Center for Transgender Equalityは、後述のように独自のアンケート調査も行っている。調査結果がそれほど詳しく発表されていないためにここでは他の調査結果を引用したが、その独自のアンケート調査のほうではこのような自由記述が紹介されている——「『学校でカミングアウトしないことで、他のトランスジェンダーやジェンダー非同調型の人が直面しているような多くの困難から、自分は身を守ることができた』」。クリスと同様の例である。Jaime M. Grant, Lisa A. Mottet, and Justin Tanis, *Injustice at Every Turn: A Report of the National Transgender Discrimination Survey* (2011) , p. 34. <http://transequality.org/PDFs/NTDS_Report.pdf> (2014/5/27 アクセス)
 - 12 ゼミ生たちがそもそもいじめに注目したのは、高校を卒業してまだ間もない彼らにとって、ごく数年前までいじめがありふれている日常を送っていたという体験の表れなのかもしれない。そして彼らがいじめを取り上げるときに言葉によるものを集中して書いたということは、彼らの見聞してきた、あるいは乗り越えてきたいじめが、アメリカほど身体的な暴力性はないということかもしれない。
- トランスジェンダー当事者でもある遠藤まめたの「セクシャルマイノリティといじめ」では、日本ではゲイ・バイセクシュアル男性の約半数が「ホモ」「オカマ」などの

言葉でいじめられた経験をもつという調査結果を紹介している。ここでも取り上げられているのは言葉によるハラスメントである。遠藤の論文全体も、いじめを種類によって分類はしていないが、言葉によるいじめについて書かれているようだ。ただし言葉によるいじめも、集団によるものだったり、教師が容認するなどすれば、かなり激しい攻撃にもなり得ると指摘されており、身体的暴力が少ないからといって程度が軽いことは意味しない。いずれにしても日米でいじめのあり方はかなり異なるのかもしれない。遠藤「セクシュアルマイノリティといじめ」『Sexuality』61号、pp. 44-51、2013年。

- 13 母親であれば子の願いを聞くはずだというのは、ジェンダー論でいう「母性愛神話」に基づく思い込みかもしれないが、現実のトランスジェンダーの子どもが家族の拒絶に遭遇するとき、母親からの拒絶が多いのか、父親からなのかという点は、考察に値することだろう。適切な資料を見つけることができず答えられないが、今後の課題として記しておきたい。
- 14 作品前半には、クリスの回想のなかで、父親のジェリーは幼いクリスがこっそりシャロンのドレスを着ていたところを見つけてベルトで叩いたというエピソードが出てくる。その後もジェリーはクリスに何かと男文化（車など）を押しつけてくる、やや鬱陶しい父親として登場する。しかしカミングアウト後はシャロンをなだめ、クリスのホルモン治療の決断を助け、性別移行に向けて後押しをするというように目覚ましく変化していく。
- 15 「『敬虔なクリスチャン』」であればどうして同性愛に賛成できないのだろうか。その点をシャロンが作中で詳しく語ることはない。
- 16 同性愛者よりもトランスジェンダーの人のほうが受け入れられていないという点について、日本では事情が異なるかもしれない。日本ではトランスジェンダーの人々、中でもトランスセクシュアルの人々は「性同一性障害」という疾患名で認知され、2001年にテレビドラマ『金八先生』で上戸彩の演じるFTMトランスセクシュアルの生徒が登場して以降、ある程度理解されているのではないだろうか。私の実感としては、日本においてはトランスセクシュアルではないトランスジェンダーの人たちや、同性愛者の人たちのほうが認知されていないようである。
- 17 アメリカのクィア理論家ケイト・ボーンスタインはこう述べている。「トランスセクシュアルはほとんどが、男性か女性かしかなく、その中間は存在しないという理論に与している」。「隠されたジェンダー」（新水社、2007、原書タイトルは*Gender Outlaw*で1994年に出版）、p. 77。ただしボーンスタイン自身はトランスセクシュアルでありながら「男だとも女だとも思っていない」（同書、p. 9）と表明しており、『隠されたジェンダー』全体が男か女かしかない性別二分法への異議申し立てになっている。し

たがって、すべてのトランスセクシュアルの人たちがどちらかの性別に帰属したいわけではない。

アメリカのトランスジェンダー／トランスセクシュアルの人たちは、ジェンダー・アイデンティティとの各人のつき合い方のちがいをどのように捉えているのだろうか。『隠されたジェンダー』において、ボーンスタインは、「トランスセクシュアルは会うことを避け、話すことを避け」ていたが、それは変わり始めていて、「トランスセクシュアルやトランスジェンダーの人たちは、今は同じ席につき、積もる話を話し、書きためたものを比べている」と述べている (p. 78)。Being Emilyの背表紙には、ボーンスタインの同書への賛辞が掲載されていることから、遅くともBeing Emilyが出版された2012年時点では、自己定義のちがいを越えた連帯が生まれていると推測できる。

- 18 小説の前半には、クレアが母親とテレビの犯罪ドラマを何気なく観ていると、ドラマに「手術前のトランスセクシュアル」(47)が登場する場面がある。MTFのトランスセクシュアルで、そのことを暴露されまいとして偶然にある男性を殺してしまい、男性用の刑務所に収容されるが刑務所内で暴力を受け、最後には全身に傷を負って血だらけになりながら病院の救急室に運ばれていく。このストーリー展開は、「手術前の」つまり移行期のトランスセクシュアルの人はバランスを欠いていて犯罪を走りやすいという前提で組み立てられており、シャロンと同種のトランスフォビアを感じさせる。つまり、マスメディアの中にもとくに移行期のトランスセクシュアルを異端視する傾向があることがうかがえる。
- 19 1973年のアメリカで設立された、セクシュアル・マイノリティの支持団体。<<http://www.thetaskforce.org/>> (2014/5/26 アクセス)
- 20 Grant, Mottet, and Tanis, *Injustice at Every Turn: A Report of the National Transgender Discrimination Survey*.
- 21 *Ibid.*, p. 88.
- 22 *Ibid.*, p. 88.
- 23 *Ibid.*, p. 93.
- 24 *Ibid.*, p. 93.
- 25 *Ibid.*, p. 93.
- 26 調査者たちは多くの家族がカミングアウト後に一時的な葛藤はありながら乗り越えていくという事実をポジティブに評価して、“Executive Summary”でこう述べている。

「いろいろなステレオタイプからうかがわれることに反して、家族の結びつきは結局壊れないことのほうが多く、トランスジェンダーとジェンダー非同調型の成員を支持することのほうが多い」。アメリカではトランスジェンダーの人がいると家族は崩壊しやすいという「ステレオタイプ」が根強いようである。*Ibid.*, p. 7.